

<p><b>おくのほそみち</b></p> <p>～ リハビリテーションのこと ～</p>			
		<p>理学療法士 奥野 景子</p>	

白木さんは、満面の笑みを浮かべながら平行棒にひょいっとまたがった。そして、それを全身を使ってガシャガチャと揺らした。私は、彼が落ちないように注意しながら「危ないからやめて下さいッ！」と、ピシャリ。ぞろぞろと男性セラピストが集まってくる。それがすごく、嫌だった。

彼は、脳卒中を発症して軽度の運動麻痺と高次脳機能障害を呈した人だった。大柄な彼がこのような振る舞いをするたびに、私は自分の戸惑いを隠すことに必死だった。当時の私は、幻想の「リハビリテーション」と理想の「理学療法士」でガチガチになっていた。

これは、私がまだ新人だった頃の出来事である。今思い返すと‘ダメなことをしているなんてわかっている’そんな声が彼の背後から聴こえてきそうな気がする。彼が満面の笑みを浮かべていたのは、ただそうすることしか出来なかつただけなのかもしれない。と、今なら思えてくる。

私は、理学療法士としてリハビリテーションに携わっています。皆さんは、リハビリテーションという言葉聞いて何をイメージしますか？運動や訓練、頑張って取り組む何かをイメージする人もいないのでしょうか？

私は今年の4月に理学療法士8年目になりました。でも、リハビリテーションが何かを明確に答えることが出来ません。数年前の私であれば、明確な何かを提示することが出来たと思います。でも、今の私にはそれが出来ません。今回は、それに通じる以下のことについて書いていこうと思います。

1. リハビリテーションにこだわる理由
2. 既存のリハビリテーション
3. 実際のリハビリテーション
4. リハビリテーションの着地点

## 1. リハビリテーションにこだわる理由

それは、リハビリテーションを仕事にしているからです（今後の展開によっては、この一文自体が文章として成立しない可能性もありますが…）。理学療法士としてリハビリテーションに携わり、お金をもらって生活をしているにもかかわらず、自分がやっていることが何なのかを言えないというのは、なんだかとても申し訳ない。出来るのであれば、自分がやっている、自分が大切だと思っているリハビリテーションについて自分なりの何かを見つけないかと思っています。

今の私が胸を張って言えることは「リハビリテーションのことは、まだよくわかりません。でも、これについて考えることは、とても大切なことだと思います」ということです。おそらく、リハビリテーションについて考えることを通して、少し大袈裟ではありますが、私が生きる上で大切なことが見えてくるのではないかと思っています。私が今まで生きてきた中で消化しきれないことを違う角度から見られるようになるのではないかと思っています。ただ、答え合わせをしたい訳でも、答え探しをしたい訳でもありません。答えがあると思っていないと言えば嘘になりますが、答えを見つけること以上に大切なことがそこにはあると思っています。

## 2. 既存のリハビリテーション

始めに書きましたが、リハビリテーショ

ンという言葉聞いて運動や訓練をイメージする人も少なくないと思います。ここでは、それに「ちょっと待った！！」をかけたいと思います。

一般的に、リハビリテーションは、病気や事故などで障害された身体機能や能力を回復させる為の訓練と認識されていますが、それはリハビリテーションのごく一部でしかなく、見方によってはごく一部にもなり得ないとも言えます。リハビリテーション (Rehabilitation) は、*habilis* (適した) というラテン語が由来の *habilitare* という動詞に *re* (再び) という接頭辞があわさって出来た言葉とされています。従来、この言葉は、中世において領主や協会から破門された者が許されて復権することを意味して用いられ、‘人間であることの権利、尊厳が何らかの理由で否定され、人間社会からはじき出された者が復権すること’を意味していました。その後、この言葉は医療においても用いられるようになり、時代と共に様々な定義が与えられてきました。その代表的な定義として世界保健機関 (World Health Organization ; 以下、WHO) が 1981 年に発表した「リハビリは、障害者を訓練してその環境に適応させるだけでなく、障害者の直接的環境および社会全体を介して、彼らの社会的統合を容易にすることを目的とする。障害者自身、その家族、そして彼らの住む地域社会は、リハビリに関係する諸種サービスの計画と実施に関与しなければならない」が挙げられます。また、リハビリテーションの理念として、人間らしく生きる為の権利を意味する‘全人間的復権’が掲げられることも少なくありません。

以上のことを踏まえると、リハビリテーションは訓練などを意味するものではなく、一つの概念だと言えると思います。しかし、上述してきたことから「リハビリテーションとは？」という質問に対する明確な答えは見つからず、その本質はほとんど見えてきません。WHO の定義では、リハビリテーションの対象として障害者が挙げられています。近年ではリハビリテーションという言葉が介護予防の分野でも用いられるようになり、その対象は拡大してきています。また、根本的に‘しょうがい’というものに関しても現在までに様々な分野で議論されており（表記方法も含めて）、確立した概念や定義の形成に至っていないように思われます。さらに、理念として挙げられる全人間的復権に関しては、そもそも人間は生物学、社会学、哲学など様々な視点が輻輳的に重なり合って存在しているものであり、人間をどのように定義するかによってもその意味が変わってくるように思います。

「じゃあ、結局リハビリテーションってなんなんだ!？」という疑問が浮かび上がってきますが、その疑問に明確に答えることが出来ない、明確な答えが未だないにも関わらず、その答えがあるかのごとくそれが独り歩きしていることに危うさを感じています。そして「リハビリテーションとは何か？」ということに対する議論がなされていないこと自体がその危うさを助長しているようにも思っています。

### 3. 実際のリハビリテーション

私が理学療法士として携わるリハビリテーションの現場では、当たり前のことですが色々なことが起きます。そりゃそうです。色々な人がいて、色々な状況があって、色々なものや人、社会との関係性がそこにはあるからです。

そして、そこで行なわれること、私が行なうことは運動や訓練と言われるようなことだけではありません。雑談をしたり、ちょっとしたセクハラを受けそうになったり、お説教をされたり、諭されたことに対して少し抵抗してみたり、小ボケを挟んでみたり、思春期の男の子とはどういうものかを語ってみたり、車のエンジンの構造を教してもらったり、お花見をしたり、冷蔵庫の食材の賞味期限チェックをしたり、足の指の間になぜか挟まっていた枝豆を気が付かれないように取ったり、自分のことを相談してみたり……。実際に書いてみると色々なことをやっているなど自分でもびっくりです。

「いやいや、ちょっと…こんなことがリハビリじゃないでしょ？」と呆れた声が聞こえてきそうですが、これは実際に私がリハビリテーションという枠の中（枠があるのかどうかもわかりませんが…）で行なっている、行なってきたことのごく一部です。これだけではありませんが、私のリハビリテーションの中にはこれらのことが含まれています。これらのことがリハビリテーションとして正しいかどうかはわかりませんが、間違っていないんじゃないかと思っています。私は、実際のリハビリテーションには、おそらく上述したような行為が含まれていると感じています。

#### 4. リハビリテーションの着地点

話はやや飛躍しますが、今のところ「リハビリテーションとは何か？」という疑問に対する私なりの答えは「生きることそのもの」ということにしています。急になんだ！？と思われるかもしれませんが、これは始めに述べた概念と実際に自分が行なっているリハビリテーションの二方面から浮き上がってきたものです。これもまた、正しいのかどうかはわかりません。ただ、間違っていないと思っています。正しい何かなんてないと思っている一方で、自分なりの唯一無二の答えを見つけたいと思っている自分もいます。どこかに着地させるのではなく、自分なりの着地点を探すこと、それを創ろうとすることを楽しみ、大切にしたいなと思っています。

#### ～ 終わりに ～

「リハビリテーションって何なん？」「えっ？答えはあるの？ないの？」「結局、何を言いたかったの！？」などなど。色々な声が飛んできそうですが、もしそうであれば私は大満足です。ないものがあるように思って進んでしまうくらいなら、一回立ち止まってみるのも悪くないと思っています。でも、ずっと立ち止まってもいられないので、ぐるぐるしながらとりあえず進んでみようと思います。

今回は「リハビリテーションが行なわれる場」について書きたいと思います。少しずつ、言葉にしていけたらなと思います。

#### 参考文献

- 砂原茂一 (1980) 『リハビリテーション』岩波書店, p. 58
- 上好昭孝 (2014) 『医学生・コメディカルのための手引書 リハビリテーション概論 改訂 第3 版』(上好昭孝, 田島文博編) 永井書店, p. 16